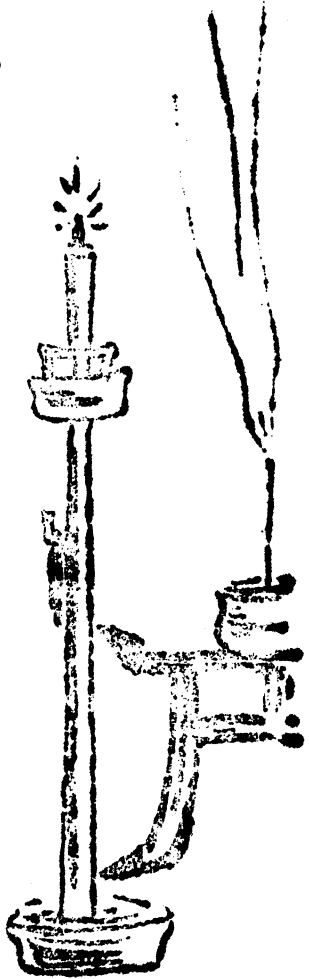


嗚呼台組と永涅槃

中五 望月海伯

嗚呼吾祖弘安永涅槃の夕を廻送し奉れば秋風颯々とし
 て嶺山の楓樹霜に飽き紅葉片々として眠のふたり葉柱
 豊哀の理を示す平地の秋蕭々たる軒窓に病体を取し思
 じ豊系系際には柱せ給へる玉負の上行若護若我久しく甘
 口任せば薄機の人には善根を植えず暫く非滅の域に入り
 たり人と水咽ぶ玉川の池地上泉仲か庵に席を移させ給ふ
 枕頭には御糸に似れ小の大本尊高し掲げさせられ玉指の



香の煙の細くしゆやかの中臨滅度時の御経梵のや
最後の梵音大地を動かして慈眼御笑みを得ばせ給うて宝
体眠のか如く大涅槃の雲に隠れ給ふ寶は是弘安五年十
月十三日哀靈峰に遠らる秋風来し月にしる山の夕日
さあ、玉川の流は涙は獨りて色悲しく草木瓦石も爲に
撫き有情動哭の聲は天地に充滿せり　あ、世に尊
き聖者が終りの何ぞ光榮ぬ　あ、世に迷り給へる六十
年の春秋は又長からじと雖も千光山上の曙光錦倉街頭
の旗風伊東の彼浪龍口の夜色佐渡の積雪近峯の朗月何
れも皆當年の悲壯を語りて知らず今に涙を催さしむ六
十年の御主は唯白と涙を以て飾らるゝのみ法華色變
の行者曰がの柱石末法の大導師今や四大を捨て、大白
在の心冥指に入り常談法の利益を遠く盡す承際に及ば

し給ふ可蓮徳とくは日月と揮ま世結へいつとなく日月
 に影を浮ふ身はり云云汝等惣む勿れ天地あらば必ず
 日月あり日月あらば必ず日還あり汝等歎く勿れ吾獨仰
 の主となりて永へに靈臺心にあリ冥山は吾が弟子檀那
 か終りの住家なるを但し信心弱くは峰の石の谷へ轉ぶ
 空の雨の大地へ落つと思ふべし如何に曰蓮が弟子檀那
 と名の心とれ光泉ある所の住家に至るを得んや汝等夙
 夜に修行を勵めを吾三四倍の利益を與へんと……
 五、深い哉聖者が慈悲あり高き哉聖者が恩与等行人矣
 御遺訓を畏み信仰を進めれば聴ては光泉ある所の住家
 に至て温き聖者が慈悲の御手は懐かしく、おれを得ん

